



ダーク エンパイア

反逆の流星たち *Dark Empire
Meteors of the Rebellion*

小説 犬熊狸喜

挿絵 竜胆

	プロローグ	反逆の流星たち	006
	第一章	新人士官候補生 アミリア・デュール	008
	第二章	メカスーツの少女戦士 マリトリウム・フリージア	029
	第三章	銃撃の機動パイロット リディキラー・ガンギミック	052
	第四章	最後の武闘皇女 リウ・ファンラン	075
	第五章	半裸の士官候補生 秘められた罠	098
	第六章	完全洗脳と偽りの告白奉仕	119
	第七章	恥辱の実験コックピット	140
	第八章	ネコ耳の皇女 破滅の獣姦武闘台	161
	第九章	復讐という名の罠	182
	第十章	銀河完全征服宣言	203
	エピローグ	燃え尽きない流星	249

登場人物紹介

Characters



アミリア・デュール

士官候補生を装い、皇帝に近づく少女。皇帝の実の娘であるが、母を捨てられたことを恨み、仇として父への復讐を誓う。

マリトリウム・フリージア

高い科学技術を誇るサイエリカ星出身の女の子。いくつもの強力な武器で武装したメカスーツを身に纏っている。

リディキラー・ガンギミック

軍需産業などで名高いホルホ・スターから来た女パイロット。巨大なロボット・システィーヌIIを操る。

リウ・ファンラン

武術で有名な惑星ハン・ローの皇女。皇族唯一の生き残りで、帝国に虐げられる民のために皇帝を倒そうとする。

バラン

銀河支配・征服を進めるバラングリード帝国の皇帝。

あからさまな揶揄。アミリアは荷物を降ろすと、素早い張り手を見舞った。

——っパアアアンっ！

広い宇宙港に平手打ちの音が響く。一瞬、シンと静まり返り、幹部たちも注視する。

「私が女を使って出世したと言うのなら、男のアナタはお尻を使って出世した、という事かしら？」

鋭い視線で睨み上げて、挑発的な笑みで言い返す。やや高い、澄んだ綺麗な声が、知的な美顔によく似合っていた。

一方で、意外にも強気な女の反応に、青年たちは気圧されている。

「てっ——てめえ…っ！」

「ふんっ！」

自分のビビりをゴマかすように、年下の女を睨む男たち。対する女の候補生は、ハナで笑って一瞥をくれてやると、荷物を持って自室に向かった。

衛星と言っても、小惑星ほどの規模になると、自転による昼夜を演出したりもする。デジタルな時間表示だけでは、生物の精神は長く耐えられないからだ。

銀河標準時、夜十時三十一分。アミリアは今、一人の中年幹部の部屋にいた。

灯りを落とした暗い部屋の中で、男の肌を唇を捧げる若い女。

「ああん……ファストン副団将さま……んちゅ……」

純白の制服をはだけさせて、左右のナデ肩も露わに、男の身体に身を寄せている。濡れた唇が上官の胸を吸い、たるんだ腹を撫でて、下腹部をチュっチュっといばむ。

肉体の移動に合わせて尻が上がり、タイトなスカートが丸く張っていた。

「おやおや、男に張り手を喰らわす強気な女が……呆れたモノだ……くっくっく」

裸で仰向けに寝そべる太った男は、帝国の情報将校だ。中年独特のイヤらしい視線を、若い女に遠慮なく向けている。

アミリアの長い髪が、数本の束になって顔に掛かる。頬を上気させる新米士官候補生は、しなを作って肢体をくねらせ、男の毛深いヘソにキスを送る。

「だって、副将の……が、こんなに……ちゅっ、チュプ……ご立派で……」

上官の視線に恥じらいながら、ロングヘアの女は更に、堅くそそり立つ勃起へと躊躇いがちな掌を伸ばした。

将校の男性器は、太さは標準ながら、スリコギのように長い。亀頭部分も長めで、カリ肉も横に拡がっていた。

色も病的な黒さで、年相応よりも、更に多くの女を知っている様子だ。

指先で突っついてからソっと包むと、掌が火傷しそうなほどの熱を帯びている。

「んん……熱くて、堅いです……それに、遅しい……」

恐る恐る、拙い手つきで上下にさすると、ペニスは一更に身を反らした。

——すりすり、しゅりすりしゅりり……。

勃起肉の根本からカリ部分の裏側までを、柔らかい指の腹で丁寧に往復。躊躇うような指は、触れるか触れないかの絶妙なタッチで、男性器に奉仕をする。

「生意気な小娘だと思っていたお前が、ワシの部屋に来た時は……何か文句でも言いに来たのかと思ったがなあ……クッククック」

人前で男に張り手を喰らわせる女が、自分にかしずいている。そんな事実には、中年の副将は自尊心がくすぐられていた様子だ。湿った鼻息が、やや荒い。

「んふん……女が男性に身を捧げるのは、その方にお力がお有りだから……ですわ」
そう言いつつ更に肉体をずらして、豊かな乳房を男の腿に、プニリと押しつける。

女の行為を受けながら、ファストン副団将はしたり顔で笑う。

「だろうさ、所詮は男と女、だからなあ……クッククク」

柔らかい双乳が腿に乗せられると、女体の熱とプワプワの弾力が実感できた。太った上官は滑らかな栗色の髪を撫で上げると、上機嫌のイヤらしい笑みを浮かべる。

「どうれ、少しはワシにも楽しませろ」

男は少しだけ身を起こすと、下着に包まれた乳房へと手を伸ばしてきた。太った指がカップの中に入り込み、プニプニの乳脂肪を剥き出しにする。

内側から乳房を引き出されると、先端部分がカップのフチとわずかに擦れた。

「きゃん……ファストン様あ」

乳首から乳房全体にピリつとした刺激が走り、アミリアは子猫のような高い艶声を上げてしまう。ゾクンと感じた背中を反らして、胸を突き出す姿勢。

カップの間に露出させられた乳房は、寄せられた豊乳となつて男の視線に晒される。谷間の深い双乳の頂点では、男性を誘うような桃色の媚突が、プクンと艶を魅せていた。

目の前に出された乳房が、思った以上に綺麗だったのだらう。男は脂ぎった顔面を、更に邪に、嬉しそうに破顔させる。

「ほほお、まるで生娘きむすめみたいに綺麗じゃないか」

白い制服を乱して細い肩を露出し、更に下着から乳房をこぼれさせている、若い女士官候補生。凜々しいまぶたをわずかに細め、上気した笑みを浮かべている。

そんな淫猥な姿に、涎も垂らさんばかりだ。

「触り心地はどうか、んん？」

そう言いながら、太った両掌が伸びてきた。目一杯に広がった指で、白い乳肌が真っ正面からムンズと掴まれる。

左右それぞれ、五本の指が食い込むと、指の間から柔らかい乳脂肪がムニリと溢れる。強い力で揉まれると、上半身の全てがキュンッと痺れた。

「ああん……そんな、強く……！」

ハスキーなボイスが艶を帯びて、甘い吐息と共に鼻から抜ける。

女部下の反応に気をよくした上官は、更に強弱をつけながら、丁度よいサイズの豊乳をもみゆりた。すると揉み遊ぶ。

「はぁ、んん……そんなに、されては……」

アミアアの頬が上気して、息が乱れてくる。心臓がトクトクと高鳴って、肌が桜色に染まり始める。

女体に官能が見えると、中年の上官は更にイヤらしい顔付きになって、もっともらしい言葉を口走った。

「上官としては、部下の事をよく知っておかねばなあ、グフフ……しかしこの肌触りは、かなりのモノよお」

スベスベの肌が、男の指を楽ませる。揉む力を柔軟に受け止める乳房は、若い弾力で上向きの丸みを維持している。

眉を弱々しい「ハ」の形に垂れさせながら、アミアアは自ら両掌を背中に廻して、ブラのホックを外した。

締めつけを解かれた双乳は、男の掌で更に上下左右にと、自由に揉み遊ばれて楽しまれる。

白い乳房が寄せられ持ち上げられて、両手の小指と薬指と中指、計六本の指で器用に弄ばれる。それぞれの親指と人差し指には、桃色の乳首を転がされた。

——ぶるむりゅ、むみもみり、ころきユッ。

「ひゃあああつ——そ、ソコは……んひんっ……よわい、ですう……！」

敏感な乳首を揉み転がされると、胸から背中へと媚弱な痺れが走る。思わず肩がすくんでしまい、谷間が更に深くなる。

白い肌に汗が浮いてくると、すべすべの乳肌はシットリと湿り、掌に吸いつくような感触になる。

「手触りが変わってきたぞ、素直な乳だ……クックク」

更に揉まれてこねられると、乳房全体が熱を上げて質量も増して、より男性が喜ぶ双乳へと変化を魅せた。

オッパイ好きの中年上官は、フヒフヒと鼻息を荒げて、乳房愛撫に熱中している。

「お前のパイオツは、フヒヒ……かなりのモノだ、気に入ったぞお」

目を血走らせて、変形するおっぱいを楽しんで、太ったファストン。もう若い女の肌の虜になったと言わんばかりの表情だ。

「私のおっぱいが、んん……お好きなら……こんなのは、いかがですか？」

そう言つて、男の掌を乳房から外す。上官が怪訝な表情を浮かべると、掌にキスをして

ご機嫌を取った。

「ちゅ……私も、少しは心得がありまして……うふふ」

汗浮く肢体をくねらせながら、男性の脚を開かせる。自ら乳房を抱えて、中年の股間に上体を密着させると、乳房の谷間に熱い勃起を挟み込んだ。

柔らかい豊乳で包んで、更に左右から締めつける。

「おおうっ——この柔らかさと締めつけは、素晴らしいぞ！」

こねたての新鮮なパン生地を、最高級のパイ生地で包んだような、不思議な感触。

プニプニの柔らかさとパツパツの弾力で、勃起全体が締めつけられる。しかも左右の柔乳は、女性独特の体温で熱い。

腔壁とは違う密着感に、ペニスはドクンと血を集めて、一段と硬化した。

「ああん、また堅くなつてえ……私もドキドキしてしまいますわ♡」

嬉しそうに、下から見上げる女候補生。男を平手で打った気丈さは、もう見えない。

上気し、湿った頬には髪が張りつき、息にも艶が含まれて、蕩けるような眼差しと一緒に興奮を伝えていた。

「私の胸の間で、ファストン様の……遅しいモノが、脈打っています」

恥ずかしげに、言葉を濁す。少しは慣れているようでも、わずかに視線が泳いだりして、所々に羞恥が見える。

そんな仕草も、男には堪らない。

「あん、あつうい……私も、あつくなってきましたわ」

堅い男性器が、皮膚の薄い谷底に密着しているから、勃起の脈動がダイレクトに伝わってくる。

心臓が男性の脈に打たれ、同調するような高鳴りを覚えた。自分の胸を覗き込むと、谷間から覗くペニスの先端は、既に透明な液球を作っている。

候補生は嬉しそうに、チラリと視線だけを向けた。

「うふふ……私の胸、気持ちいいですか？」

十八才のちよつとイジワルな表情も、小悪魔っぽい魅力で輝いている。

脂ぎった上官は、急かすように栗色のロングを撫でた。

「ああ、もつとワシを気持ちよくできれば、お前は優秀な候補生という事だ」

「無論ですわ、くすくす」

イタズラっぽく微笑むと、乳房での愛撫を開始したアミリア。

乳房の下側を特に強めに挟み、勃起の根本からさすり上げる。亀頭部分まで摩擦をしたら、今度は乳房全体を均等に圧迫して、さすり降ろす。

——むちぷるりゅ、ぷにゅるりゅ、むっちゅりゅ、るぷるぷむりゅ。

上下の摩擦運動は、常に乳肌が勃起全体を圧迫している、密着愛撫。

ペニスに掛かる圧力もバラつきがなく、根本から亀頭部裏側までが、常に柔らかな圧力を受けている状態だ。

「むう…思った以上に、いいテクを身に付けているようだなあ。クフフ」

「お褒めに与り、光栄ですわ。それでは、こんなのは…」

ヒジとヒザをついた四つん這いのまま、栗色髪の軍服少女は、紅葉に染まった愛顔を上官に向ける。

上体を前後に揺する動作も加えると、ペニス愛撫は更に激しさを増してゆく。

——ぶルちユむチゆプるチゆつ、たぶタぶルつムリユふるリュつぷるプリルつ。

谷底の肌に浮くわずかな肋骨の起伏で、ペニス裏側の弱点を、素早く何度も上下に愛撫する。柔らかい乳脂肪による圧迫力だけでなく、肉体の別なる箇所も利用するアミリアだ。

しかも、奉仕のタイミングを男性の鼓動に合わせてもいる。ペニスがヒクンと蠢動する度に、裏側のスジをこすり上げていく。

「おおうっ——ここまで、できるとは…：…なんとイヤらしい娘だ…フフン」

予想以上の快感を受けて、中年の上官は一瞬だけ腰を引いたものの、すぐに勃起を押しつけてくる。

「私、女ですもの…：…うふん」

さつきよりも熱肉を押しつけてくる男性に対し、媚びるような流し目までくれる、軍服

の少女候補生。

これも全て、男性社会である帝国の中で生き残る為の、女の処世術——。

自らの肉体を武器にしている事を、自分の身体で白状したのだ。

そしてその自白によって、男は自尊心を大いに刺激されていた。

「クッククック……可愛い女だ」

そんな告白を認めた上官に、頬を取られて、イヤらしい視線で見下ろされる。まるで飼
い主がメス犬を見るような、完全に男女の上下関係を見る目。

そして女は、節くれ立った指に頬を寄せながら、熱っぽい眼差しで男を見上げる。

満足そうな脂っこい男に、アミリアは乳房愛撫で摩擦しながら、更なる奉仕を捧げた。

「うふふ……まだまだ、ですわよ」

中年上司に愛らしいウィンクをくくると、頭を下げ、唇を大きく開く。

「おう？」

栗色の髪がサラリと流れて、薄いライトで艶を見せる。

唾液にまみれてヌロリと伸びる、小さくて赤い舌。谷間を上下する勃起の先端が、熱い濡れ舌でヌぷり、と受け止められた。

「んん……苦ひ……」

傷んだ食塩にも似た男汁の味で、眉間が官能的に曇る。

しかしそれも一瞬で、アミリアは嬉しそうな上目遣いを向けながら、中年男のペニスを呑み込んでいった。

「んん……んぷちゅ……んくん」

鈴割れに舌を差し込みながら、亀頭部分を唇に包み込む。

更に、カリ部分の裏側を濡れた唇で締めつけながら、尖らせた舌を鈴口にねじり込ませてゆく。

ペニス本体を締めつけながら、カリ肉の裏側と先端の割れ目を刺激する。唇と舌での同時肉責めに、ファストンの腰がブルつと震えた。

「おぐくっ——なんて締めつけと舌使いだ！」

まぶたがヒクつき、息が乱れる。たるんだ腹が、タップンと波打ち、勃起が力強く内側から太さを増した。

更にアミリアは、乳房での上下摩擦のタイミングに合わせて、舌と唇での別なる愛撫を加えてゆく。

勃起をさすり上げると同時に、唇を締める。根本まですり降ろすと同時に、舌をやや強く鈴口に差し込んだ。

「んん……んっんっ、ぷふ……うふふ、いかがですか……んぷんぷ……」

豊乳パイズリでの密着愛撫、そして唇でのカリ裏への刺激と、濡れた舌での鈴口責め。



更にペニスは女の唾液でタツプリと濡れて、ヌルヌルとイヤらしく肌を滑った。

上半身全てを使った勃起責めに、男は射精へと導かれてゆく。

「いぞつ、アミリア……そのまま、続ける！」

薄く目を閉じ官能に耐え、それでも余裕で口許を歪めている。中年男性の意地だろう。

そんな上官に、勃起を唾えたまま愛らしい笑みを寄こすと、少女候補生は更に愛撫の速度を上げた。

「んふふ……ご命令のままに……んっんっんっ……！」

——むぶちユツタふるっ、ぷるムプるむっ、んちゅプちゅっぱくむつつぶぶ！

乳房の上下動は倍以上に速くなり、合わせて唇の締めつけと舌責めもタイミングを早める。

パイズリの圧力が更にながり、ペニスへの締めつけが強くなる。唇の密着もキツくなつて、更に舌責めも強められた。

「おごううっ——いぞつ、いぞおっ！」

アミリアの肌も桜色が強くなり、心臓の鼓動も早くなる。霧吹きで吹いたような汗が体温で蒸発して、男の性臭と女の性香が混ざりあう。

牡と牝のイヤらしい匂いが、夜の部屋いっぱいにもんと広がっていた。

肉体奉仕をする女部下に、ファストンは下品で淫らな笑顔を見せる。

「まっ、まさか——!？」

イヤな予感の中。メカの機能を低下させる磁気が、マリト自身に射出された。

「ダメえっ……ああっ！」

媚弱な電気が身体に走る。肉体には何のダメージもないものの、一瞬でスーツの機能が十パーセントにまで低下させられた。

同時に、張りついていた全てのタコメカが機能を完全に停止、落下してゆく。そして自由になったと思った途端、マリトは新たなタコたちに再び取りつかれていた。

「一体、なによっ!？」

左手首のコントロールボタンに、触手が伸ばされる。

「そっそこは……!」

スーツの機動ボタンも、ここにあるのだ。普段は装着者以外には触れられないよう、頑丈にカバーが掛けられている。

しかしスーツがパワーダウンしている今は、タコ触手でもロックを解除、というか、破壊できてしまうだろう。

機動ボタンのメタルカバーが、触手の力で引きちぎられてゆく。

「やっやめてようっ……だめえっ!」

逃れようと手足を藻掻くも、パワーを失ったスーツでは抵抗にもならない。マリトの頭

が、焦燥にかられる。

——メキキッ、ミバキリッ!

カバーが壊されて機動ボタンが剥き出しにされると、触手によってスイッチがオフにされてしまった。途端にスーツの機能が停止、アーマー各所のセンサーも光を失う。

「やつ、やだよおうっ!」

そしてウェポンコンテナなど、全ての装備と力を奪われると、更にマリト自身に再起動できないように、ボタンの上から新たなメタルカバーが溶接されてしまった。

戦闘力を失ったアーマー少女は、空中で大の字に拘束されてしまう。

「こ、こんな事お——やああんっ!」

そして磁気ライフルを撃ったタコメカが近づくと、目の前に立体映像を投影。

『ほほう、そのスーツは……どうやら全能プラントで生産されたモノのようだねえ』

面白そうにこちらを見る男。いかにも頭脳タイプという細面の若い顔に、マリトは見覚えがあった。

「あっ、アナタは……ドルス副部長さんっ!」

かつてサイエリカの技術省で、開発庁第二開発部の副部長を務めていた官僚、ドルスラング・ビスティム。

「なんで……まさかっ!」

帝国の侵略に、技術の漏洩を危惧したサイエリカが自爆と敗戦を決意した時、プラントの爆破を買って出た人物だ。

しかしその後の調査で、ドルスの遺体は発見されなかった。

「……そうかつ、アナタは自爆させたプラントの技術をいち早く持ち出して、帝国に売り渡していたんだっ。この裏切り者うっ！」

『ふふん』

母星を売り、技術の悪用を懸念する事すらなく、自己保身に走ったのだ。

「アナタなんてえ、技術者の風上にもおけない、ヒキョー者だようっ！」

敵が小型の光波防御帯を実用化していたのも、納得ができた。この男が自身の身の安全と引き替えに、帝国に流していたからだ。

『何とでも言いたまえ、ワタシは帝国に迎えられて以来、好きに研究をさせてもらっているのさ』

まるで、自分には責められる謂れはない、とでも言いたいようだ。尊大な理工学系の男は、メカタコを操り始める。

「きゃんっ——なに、するのよう……！」

『キミのそのスーツも、頂こうかと思ってね』

女体の柔らかさ、そのままになったスーツの上から、タコ触手が絡んできた。プニプニ

の上腕や張りのあるお尻、むちむちな健康色の腿が、締めつけられて揉み上げられる。

更に胸アーマーのロックを破壊されると、スーツに包まれた豊かな乳房を触手巻きにされた。

熱っぽい触手で乳脂肪を縛り上げられると、心臓がトクンつと跳ねる。そんな肉体反応に、処女の本能が恐怖を覚えさせられる。

——すりシゆる、ふるムちり、ふるにゆ、むにユりもみり。

「さっ、触らないでよう、ヘンタイいつ！」

身体を護ろうと藻掻くものの、パワーを切られてしまつては、さすがのメカ少女も抵抗の術がない。

少女の罵りに、男は不埒な考えを実行し始めた。

『ヘンタイかい、なら話が早いな。スーツだけを手に入れるよりも、キミ自身も手に入れる方が有効だからねえ……フフン』

笑いながら何かの操作をすると、タコ触手から半透明な液体が噴射される。

「きゃっ——なによこれえ、イカみたいに臭いっ!？」

粘性を持った液体は、処女のマリトが知らない、牡の性臭に似た匂いを放っていた。

しかし驚愕するのは二オイではない。パワーがなくても液体など染み込むはずのないスーツに、その液体が染み込んできた事だ。

「なっ……どうして…!？」

白色のスーツ素材に、液体が浸透してゆく。更に水分を含んだスーツは、乳房やお腹、お尻など、肌の色をハッキリと透けさせてゆく。

「ひゃあっ——ヤダヤダよう！」

『ワタシが作った特殊な薬液さ。もちろん、ただ染み込むだけではないよ』

男の言葉が終わるよりも早く、少女はその薬液の効果を体験させられた。液体を受けた乳房がジワリと痺れて、知らない熱がふつつつと湧き始めたのだ。

「んく……なに、感じい…!？」

『ほほう、まさかオナニーも知らないウブな少女なのかな？』

「おっ——おな…!？」

心臓がトクトクと高鳴って、全身の力が気怠く抜けてゆく。自慰を知らない少女が初めて体験する、性の感触。

男の言葉に戸惑い、処女戦士は頬を染める。

『その液体を浴びると神経が過敏に開発されて、官能なしではいられない身体になる。実験の為の準備、といったトコロかな』

「そっ——そんなっ」

染み込んできた薬液は、強い催淫性を含んでいたのだ。ドルスラングは捕らえた少女を



使つて、何かの実験を施すつもりのようなのだ。

恐怖する穢れを知らない肢体に、淫邪な淫液が染み込んでくる。

「やだっ——やだようっ……おなか、腿にもうっ！」

液体を受けた肌が、キュンと熱を帯びる。過敏にされたココナッツ色の内腿を撫でられた途端、マリトの身体が未知の感覚で仰け反った。

「きゃんんっ——触ら、ないでよう……っ！」

腿からお尻がジワつと痺れ、背筋から脳までが甘く灼かれた。初めてのの性感に心臓が早鐘を打ち、息が乱れて焦燥が隠せない。

そんな初々しい反応に気をよくしたのか、卑劣な裏切り者はマリトの巨乳を触手巻きで責め続けた。

『そのデカ乳を、もつともつと開発してやろう』

——ぶりユつたぶる、もつちユりゅ、ぶるたぶり。

「やあんっ……あくっ、この——んんんん……っ！」

メカ製の触手は無機質な艶を持ちながらも、柔軟に変形して肌を這い、熱を持って絡みつく。

幼い外見を持つマリトの巨乳が、ずらされたスーツから剥き出しにされた。

「やあんっ——胸が……っ！」

双乳を完全露出させられると、ドルスの視線が集中するのが解る。視姦される恥ずかしさに頬が熱くなり、思わず顔をそむけてしまった。

無数の触手に巻きつかれると、根本から先端に向かって、何度も何度も絞り揉まれる。

「はううっ……いつまで、触手っ……胸をう……っ！」

『ではこんなのはどうかな？』

男が再び何かを操作。数本の細い触手が寄り集まると、大きな成人男性の掌に似た形になった。

「て、掌みたいなの、触手……ひいんっ！」

ブサイクな触手掌で生巨乳を掴まれて、まるで男性の掌で揉み遊ばれているように、イヤらしく変形させられる。

（胸の、奥が……トクトクってえ……！）

日焼け乳房は、パン生地を練るように、縦長や寄せあわせでの陵辱を受ける。

淫らに形を変えられる度に、熱い痺れがジュっと生まれて、背筋から全身へと広げられていった。

「むねっ——んはうう……やめてよう……っ！」

意志では抵抗しているのに、身体は勝手に脱力してゆく。細い胴体に巻きつく触手で、お尻の谷間をスルリと撫でられた。

「クソっ、鈍ガメのクセにっ！」

次第に焦燥へと追い詰められてゆくりディ。極薄スーツの中には汗が浮かび、システイの目も弱々しく点滅を見せる。

「コイツっ、どんだけ喰らえば満足なんだっ!？」

そして、全ての弾薬を使い果たした、銃撃の鋼鉄乙女。

「弾がっ——チキショーっ！」

残されたのはライフルの一撃のみ。しかしこれは皇帝を抹殺する為の、たった一発の、希望の銃弾。

「……くそう、どうすれば……！」

護りたい故郷の人々が頭に浮かぶ。悔しさの余りタワーを睨んだ一瞬、隙が生まれた。無数のヘビアームが隙間なく周囲を取り巻き、球形になって閉じ込められる。

「しまった——くそうっ！」

このままでは、進路も退路も奪われてしまう。

腕に隠されていたプラズマソードを右手で引き抜き、脱出を試みる。しかしその腕は、カメの腹部から出現した新たなアームによって、素早く捕らえられてしまった。

「あうっ、こ、このヤローっ！」

更に左腕が掴まれ、両脚が搦め捕られる。胴体までもが拘束されると、女性型巨大ロボ

ットは敵に引き寄せられて、背中から捕らえられてしまった。

「チキショーっ、放せえっ！」

渾身のパワーで抵抗するものの、更にアームの数が増えてくる。唯一残された武器、荷電粒子ライフルにも、捕獲アームが伸びてきた。

「ラ、ライフルがっ——やめろっ…ああっ！」

必勝の一撃まで奪われてしまう。手足の付け根までアーム巻きにされた少女型機動兵器は、開いた敵カメのお腹に、×字の姿で拘束されてしまった。

「チクショオオ…アタシは、なんて失敗を…っ！」

必死にコントロールするものの、もはや機体はビクともしない。

「このままじゃ、みんなの想いが無駄になる！」

コックピットの中で焦燥する。そしてモニターには、痩せた年寄りの男が映し出された。

『ほほう、半生体ロボットか。これは帝国にもない技術、興味をそそられるのお』

『お、お前…だれだっ?!』

白髪の男はジロジロとコックピット内を見回した後、自らの正体を明かす。

『ワシか？ ワシはマデスン。帝国一の天才科学者じゃっ』

『——っ?! その名前、確か……』

数十年前、行方不明になった科学者がいた。

ロボット工学と生物工学に長けた天才だったが、密かに狂気の生物実験を繰り返していた為、ホルホ・スターの学会から永久追放された科学者。

「そいつが：マデスン・タルケン！」

母星の恥とされる男が、目の前にいる。リデイは強い視線でマデスンを睨みつけた。

『ほお、ワシはそんなに有名なのかい。まあそんな事はどうでもいい』

しかし狂気の科学者は、自分の事より捕らえたエモノに興味があるらしい。

男が何やら操作する。と、カメラロボットから、人間が使う鉛筆ほどの太さの鉄線、スネークワイヤーが伸びてきた。

「なつなにを…っ!？」

細いワイヤーは自在にクネり、極細のメカヘビの如く、装甲の隙間から侵入。

途端に、ロボの目が危機的に点滅をした。各種センサーが、リデイに警告を告げる。

「システィっ——ジジィっ、何してやがるっ!？」

『このロボと、そしてアンタ自身を、よおおく調べたいのじゃよ、ふひひい』

捕らえられた機体が有機的に痙攣をすると、ガクリと停止。そして駆動系が沈黙、センサー系が暗転し、更に動力機関がパワーダウンさせられてゆく。

「こっこれは!？」

『その機体は、ワシの作ったウイルスで乗っ取る。ついでにアンタの身体もな』

「何だって——ああっ！」

コックピットの壁から、床から、天井から、小さな穴を開けながらスネークワイヤーが侵入してきたのだ。

「コっ、コイツっ！」

銀色に艶めく機械のヘビが、極薄スーツを纏った美脚に、腕に、胴体に、そして首にと絡みついてくる。

護身の銃を抜いてワイヤーを破壊するものの、アっという間に弾丸は尽き、それ以上の数のヘビが絡みついてきた。

「くうっ……こんなっ……！」

極薄スーツに包まれたスレンダーな肢体が、細いワイヤーに縛り上げられる。リディは、バイクに跨がったまま両腕を後頭部に充てるような姿勢で、拘束されてしまった。

捕らえた少女をモニター越しに眺め、マッドな老科学者は邪眼をギラリと輝かせる。

『スレンダーな身体に、ピッタリのスーツ……なかなかエロい実験素材じゃないかい』

「なん、だとお……！」

男の言葉にゾっとする。細くしなやかな肢体にボディペインティングを施したような女体を、銀色のヘビが絡みつき、這い回っていた。

細いウエストやツンと上がったお尻、薄い胸が、ヘビの出す何かの液体で濡らされてゆ

く。

「このっ：放せよっ！」

身体を反らされて胸部を突き出す格好にされると、脂肪の少なすぎる胸は更に薄く見えた。全身タイツにポツンと浮かんだ小さな乳首だけが、女性らしいとも言える。

小豆のように小さな突起が、ワイヤーの先端でツンと突っつかれた。

「ぐっ——このヘンタイ科学者！」

ガサツで勇ましい中性的なパイロットでも、乳首を意識させられてしまうと、羞恥で頬が赤くなる。そんな少女特有の変化を楽しむ、変質科学者。

『小さい胸、ワシの実験に丁度よいのお。実験開始じゃ』

男が手元を操作すると、一本のスネークワイヤーが怪しく動いた。先端部分から針のような小さいカッターを出現させると、リディの胸部に充てられる。

「うく、何をっ——!？」

一瞬だが、死を予感させられるパイロット。

極薄ボディスーツに充てられたカッターワイヤーが素早く円を描くと、スーツ右側の乳首部分だけが綺麗に切り取られてしまった。

「なっ——!？」

ボディラインを浮き立たせるパイロットスーツから露出させられた、自分の片乳首。桃

色の乳頭が視界に飛び込むと、リディは更に羞恥へと追い込まれる。

剥き出しにされた乳頭部分が更にワイヤーで挟まれ、軽く引つ張られると、薄い胸の中で乳首だけが、イヤらしく目立たされてしまう。まるで変態にされた気分だ。

(このっ、くらいでっ！)

裸よりも、イヤらしくて恥ずかしい格好。頬を染めるものの、強気な少女は鋭いツリ目で、モニター越しのマッドサイエンティストを睨みつけた。

「なんだよっ、こんなのっ！」

そんなリディの視線を、男は蚊ほどにも感じず、実験とやらを開始する。

『そうかい、ではこんなので、どうじゃ？』

別のメタルヘビ、二体の先端が、透明な吸引口に変形する。聴診器みたいになったワイヤーは、中心部分に極細い注射針を持ち、そのまま左右の乳首に吸着してきた。

「なっ……なにすんだっ——んぎっ?！」

——ぶちゅん。

バージンピンクの右乳頭とスーツに包まれた左乳輪が、透明な吸引口に包まれて、両の媚突の先端に注射をされる。

そして、イヤらしいヘビを振りほどこうと藻掻いたリディの身体に、変化が訪れた。
「放せっ——あいいいいっ！」

包まれた乳首が熱を持ち、乳房全体が急激に熱くなる。

「な、何だよ……これえっ!？」

痛みはなく、しかし乳房の少ない脂肪が燃えるように熱い。心臓がトクトクと早鐘を打ち、危機感からか、肌には汗が浮いていた。

(胸が、身体がっ——熱いい!)

固定されて身体を捻ると、引き締まったお尻のラインが官能的に上下する。

そして、投与された薬物の威力。リディの微乳が鼓動に合わせ、少しずつ質量を増し始めたのだ。

「な、何いっ!？」

ブラの必要すらなかった胸が、お皿を伏せたようなサイズになり、ソフトボールほどの膨らみに成長し、掌に丁度よい大きさへと発達をする。

「ア、アタシの胸が……!？」

自分の身体に起きている変化なのに、目の前の現象が、まるで現実とは思えない。

更に豊乳を超えて、巨乳化する双乳。自分の肉体が、敵の手で好き勝手に変えられてゆく事実にも、激しい恥辱と怒りが沸き上がり、意識が灼かれる。

「やめろっ……やめろよお……!」

乳房は尚も爆乳化され、遂にはスイカほどの大きさにまで肥大化されてしまった。右の

乳首を引っ張られると、スーツの穴が伸びて、巨大で丸い乳肌に食い込んでくる。

そして薬物の副作用なのか、身体が性熱でどうしようもなく、熱く疼く。

「こ、こんな、胸え……っ！」

自分のスレンダーな身体はコンプレックスだったけど、同時に愛しさも感じていた。そんな胸を、憎い敵の手で勝手に変化させられてしまった事は、悔しくて仕方がない。

肉体改造は更に続けられる。お尻を持ち上げられると、肛門部分に別のワイヤーカッターを充てられた。

「まっ、まさかっ……!？」

くると円を描かれて、肛門が露出させられる。薄いカフェオレに似た色の排泄器官には、中心部分にチューブを持った、透明な聴診器が充てられる。

今度は浣腸という方法で、薬物が注入された。

——つぶん……ちゅぷぷ……。

「ひいっ——やっ、やめろ、よおおっ……!？」

他人にムリヤリ浣腸をされるなんて、死よりも恥ずかしい。強気な眉がヒクヒクと震えて、噛みしめた歯がカタカタと鳴ってしまふ。

肛門からお腹の中へと、暖かい液体が広がってゆく感覚。浣腸という恥ずかしすぎる責めに、女性としての尊厳が、容赦なく踏みにじられてゆく。

そしてお尻全体が熱を持つと、ヒップが淫らな発達を始めた。

「お尻が……やだあつ！」

胸だけでなく、女尻までもが変化させられる。お尻から腸が、更に隣の子宮までもが影響を受けて、自慰以上の飢餓感を覚えさせられてしまう。

「はあ、はああ……やめ、ろおつ……ぐくくつ！」

そして薬物注入が終わられると、リディの腰は以前のそれではなかった。引き締まった少年のようだった腰部が、左右に柔らかい広がりを見せている。

発達したヒップはたっぷりの脂肪を乗せていて、お尻の谷間も淫らに深い。

「はあ、ああ……アタシの、身体が……！」

小さかった乳房はGカップ程にまで大きくされて、細いお腹にも薄く脂肪を付けられてしまった。更にお尻はヌードモデルみたいに、豊かで卑猥な曲線を魅せている。

発達させられた肢体によって、極薄いスーツは、皮膜の如くムチムチに押し伸ばされていた。少しでも身体を捻ると、それだけでパチンと弾けてしまいそうだ。

まるで、男に媚びる為だけに発達したような、イヤらしいライン。しかも女体は淫熱に灼かれ、まるで焦らされているかのように、刺激を求めさせられていた。

「よくも、こんな身体に……！」

感情を隠さず睨みつける爆乳巨尻のパイロットを、男は嬉しそうに観察する。



「トゥアッ！」

細い背中をしならせながら、最後の一人にトドメの裏拳を叩き込む。十二人の追跡者を全滅させると、リウは注意深く周りを探った。

(急がなければ……しかし慎重に)

気配のない方へ走ると、開けた場所が見えた。小さな湖があり、隠れる場所もない。

「しかしここを通らねば、中央タワーには——むっ！」

——ガサガサッガササッ！

突然、周囲から多数の物音が聞こえた。草の間から覗ける人数は、数十人という。

気付いた時には、既に囲まれていた。武闘の皇女はその事実よりも、気配を感じられなかった事に驚かされる。

(これ程までの人数に、私は気が付かなかったのか……!?)

ユックリと包囲の輪を縮めてくる者たちからは、気配どころか殺気すらない。

(……まさか、人間サイズの暗殺ロボット……いや、そんな兵器が開発された、などという情報はない……!)

そして周囲を注視するリウは、目視によって意外な正体を知らされる。

「なっ——あ、あなたたちは……!?’

尖った耳や垂れた耳、そして美しい容姿。ポロポロの奴隷服を着せられているが、接近

する者たちは間違はなく、かつて攫われた母星の男性たちだった。

しかも男たちは、みな意識を失い、首輪を巻かれ、完全に操られている。

「なんと、非道な行い……っ！」

そして頭上に隠してあったらしいスピーカーから、若い男の声が聞こえてきた。

『バラン皇帝の衛星へようこそ、皇女リウ・ファンラン様。僕の奴隷たちは、お気に召しましたか？』

「貴様……何者だ！」

激しいまなじりの武闘少女に比べ、声は余裕を感じさせる。

『ハン・ローと敵対していた星の者……と言っても、僕の事などご存じないでしょう』

「敵対する星……暗殺武術の惑星、ゲシュ・リインの者かっ!？」

卑劣な暗殺術で有名な、ゲシュ・リイン。金で雇われたその暗殺者たちは、武と義を重んじるハン・ローの武闘家たちによって、何度も阻止され続けてきた。

(ハン・ローに逆恨みを持つ者が、私の星の人々を道具にしている……!)

その事実、リウは激しい怒りを感じる。

『ウォンと言います。僕も子供の頃に攫われたのですが、頭がよかったので命拾いしました……お陰で皇女様を相手に、同胞の恥を晴らせるのです……アハハ』

「それでこのような非道……痴れ者めっ！」

怒りの言葉をぶつけた途端、脳改造された男たちが襲いかかってきた。

——グワアアアッ、ゲヒヤギヤアアアッ！

涎を垂らして白目を剥いて、前後左右から迫ってくる。その表情は、完全に狂者だ。

「くうっ……みんな、正気に戻れっ！」

軽い手で昏倒を狙うも、相手の筋肉は異常に頑丈で、全くダメージになっていない。それどころか猛獣の如く雄叫びを上げて、棍棒を振り回してきた。

前から上から、右から斜め下からと、襲撃者たちの攻撃が休む事なく降りかかる。武闘少女は黒髪を靡かせながら、全ての襲撃を紙一重でかわし続けた。

「みんな——どうか正気に……くふっ！」

上半身を反らすと双乳が天を向いて揺れて、屈むとお尻がフルンと突き出される。

薄いチャ・イナは汗を浮かせ始めた肢体にピタリと張りつき、ヘソの窪みや乳房先端の小さな媚突、更に発達した女尻の谷間を扇情的に魅せていた。

多勢の攻撃で、さすがのリウもわずかに息が乱れ始め、身体にも小さな切り傷が増えてゆく。反して、操られている男たちには、疲れる様子が全くない。

（このままでは、追い詰められるだけだ！）

そして人々を想う皇女は、悲壮な決意を固めた。

「すまないっ、みんなっ！」

左から襲いかかる男の頭部をヒジ鉄で割り、背後からの襲撃者の首を回し蹴りで叩き折る。皇女として心を痛めながら、せめて苦しませずに、一撃で天へと送る格闘姫。

(母星のみんなの為なのだ、許してくれっ！)

数人の男性たちを打ち倒したものの、敵の数は減らないどころか、更に増えてゆく。

「一体、何人の男性たちを……っ！」

目的のタワーに近づくどころか、ジリジリと後退させられている。

同族との戦闘という異常事態に気後れさせられていたせいか、リウは足下に隠れた窪みに気が付かなかつた。下げた足は地面を踏まず、数十センチの窪みに落ちて、バランスを崩してしまう。

「あうっ——しまった！」

そして大柄な男が狂った目の色で、柱の如き太さの左腕を振り回してきた。体勢を崩した少女には、避ける余裕は全くない。

——ブルウウンッ、ボギキイイッ！

「ぐはうっ——!!」

咄嗟に右腕での防御だけはしたものの、まるで巨大な木槌で殴られたような衝撃。力任せの一撃で、リウは十メートル近くも吹っ飛ばされていた。

「あぐっ……かはっ……！」

(な——なんという、怪力……！)

必死に立ち上がるものの、殴られた右上腕部が痺れて、激痛が走る。殴り飛ばされたダメージと地面に叩きつけられた衝撃で、身体の力が抜けて言う事を聞かない。

殴った相手を見ると、左の下腕部が異様な方向へと折れていた。その姿に、皇女はあらためて驚愕させられる。

「痛みさえ、感じないのか……なんと非道な……っ！」

そして怒れる瞳のフラつく肢体を、背後から数名の男たちに押し倒されてしまった。

「ああっ……は、放しなさい……ああっ！」

両腕を捕られ脚を掴まれ、うつぶせの大字姿勢で押さえ込まれる。

武術の天才と謳われた皇女といえど、十人以上の男の力で押さえつけられてしまったては、身動き一つ取れない。

更に男たちの手によって、美しい赤い衣装が引き裂かれ始めた。

——ピリッ、ピリィィッ！

「や、やめるのだっ……みんなっ！」

背中を剥き出しにされて、脇腹を露出させられて、左胸部分を剥ぎ取られる。黒い髪を掴まれて引っ張られて、顔を上げられると同時に胸を反らされた。

「あうう……お、おやめなさい……っ！」

突き出された胸で、プルンと揺れる白い片乳。豊かな乳房を露出させられてしまうと、苦痛の表情の中にも、羞恥の朱が頬を染める。

肌を晒されてゆくリウに対し、スピーカーから驚愕の事実が告げられた。

『あなたの潜入など、シャトルに乗り込んだ時点で察知できていました。暗殺者ゴッコは楽しかったですか、ハハハ？』

「なん、だと…!？」

『そんな事にも気付かないとは、やはりハン・ロー人は見た目どおり、無知なケダモノだ』
同族を罵り笑う男に、怒りが爆発する唯一の皇女。

「きつ、貴様とて……私たちと同じ、帝国に蹂躪された者であろうにっ！」

『だから僕は、ゲシュ・リイン人をやめたのですよ。母星も数年前、滅亡させました』

「——っ!？」

男の返答に、耳を疑う。

『今では、異種族混成の天才である僕を笑う者など、帝国にはいません』

自らの星を滅亡させるなんて、もはや完全な狂気だ。

「母星を……なんという——はっ!？」

気が付くと押さえつける男たちは、黒い拘束具を手にしていた。そして捕らえられたエモノは、両の手首に足首にと、鋼鉄の留め具を繋がれてゆく。

——ガチャリッジャキッ！

黒い手錠と足かせを留められた武闘皇女は、更に耳を掴まれて頭を引き上げられる。

「おっ、おやめなさいっ、みんなっ——あううっ！」

そしてリウの視界に飛び込んできたのは、リベット 鋌の打たれた黒い首輪だった。

「ま、まさか……っ！」

トラなどの危険な獣を繋ぐ為の、分厚い鉄製の首輪。これこそ、かつてハン・ロー人たちが性道具として扱われてきた、屈辱の歴史、そのものだ。

決して忘れ得ない恥辱の証が今、皇女たる自分の首に巻かれようとしている。

「やっやめろっ……そんな、非道っ——あぐっ！」

必死に首をすくめようとすると、男たちの怪力で耳を引っ張られては、どうしようもなかった。首もとに冷たい金属が触れて、黒い髪をかき上げられる。

「くっ——くああああっ！」

——ガチャリッ！

気高き皇女の首に、獣の証である首輪が巻かれてしまった。鎖の繋がった鋼鉄の拘束具は、絶対に外す事ができないように、特殊な溶接を施される。

自分たちはまた、性道具にされる。しかもそれが、皇女である自分によって——。そんな悪夢が、まるで決定された未来のように、脳裏を埋め尽くしてゆく。

「おのれ……我が種族の、屈辱をお……っ！」

氣丈に睨み上げる少女の頬は、焦りと怒りと悔しきで上氣していた。そんな皇女を、スピーカーの若い声は更に罵る。

『何よりも血統を重んじる、ハン・ロー人。惑星を代表する天才武闘家にして、皇族最後の唯一姫が、クズの男たちに穢される……アハハ』

ウォンの言葉に、女として恐怖を感じ取るリウ。首と手足の鎖を操られて、動物のような四つん這いにされると、男たちによる蹂躪が始まった。

「ぐへへえ……リウウ、さまだああ……」

「オンナあ……リウさまオンナああ」

「あ、あなたたち……っ！」

白目を剥いたまま、虚ろに笑う男たち。背中や下着、左乳房までを剥き出しにされた四つん這い皇女に、舌を伸ばした無数の顔が近づいてきた。

「うわあっ——や、やめなさいっみんなっ……！」

細い腕を熱い舌で舐められて、白い背中を唾液の垂れるペロで舐め撫でられる。たつぷりと発達した巨尻の頬を、濡れた舌でペロりと愛撫された。

「ひうっ、くくっ——みんな、正気にひっ……！」

男たちは、本能を刺激されているながらも操られている為か、肌の舐め方が異様に優しく、

そしてイヤらしい。

——べちやつずるちゆつ、べちやぶちユつベロずチユうつ！

舌先だけを使つて、触れるか触れないかの絶妙なタッチをされたかと思うと、不意に舌全体で広く舐められて、唇で小さく吸われた。

「うで、やめつ——はひつ…ひいつ…背中もふつ、お尻もつ——さはる、なはあつ！」
舐められた箇所が、小さく鋭くジュンつと痺れる。よりくすぐったい箇所が性感帯だと悟られると、更に開発するように、しつこく入念に吸引愛撫をされた。

「はっはあつ…やめ、なさひいつ——そこはっ、ふれるつ——だめだあ…っ！」
四つん這いで全身を舌愛撫されて、唾液に濡れる肌の全てが、異質な官能で灼かれる。

「おいしい肌だあ…はあ、はあ…ベロリ」

——べつべちやつ、ちゆプちユうぶつ、はあ、はあああつ！

濡れた肌に、興奮した男の息が熱く掛かる。不潔に扱われているせいか、生臭い。

(くっ臭い…息を、掛けないで…！)

思わず嘔吐感が湧き上がるものの、男の息で、肌の感度が更に上げられてしまう。上体を反らしてお尻を上げて、肢体を左右にくねらせる、半裸の凛々しいネコ耳少女。

(こんな、恥辱…っ！)

密かに自慰をする事はあつても、他者に性感を与えられる事など初めてだ。しかも相手



「はあ、はあ……ごめん、なさい……私は……」

栗色の髪を掴まれて、涙の滲んだ顔を上げられる。

「なんだよつ、何を許して欲しいんだよつ！」

男による尻叩きが怖くて、もう考える力も余裕もない。アミリアは囚人たちの望む言葉を口にする事以外、何もできなかった。

「私は……女を使って……出世、しました……」

「聞いたかつ！」

「このつ、恥知らずの売女があつ！」

男たちの怒りは更に燃えて、より苛烈な暴力となつて襲いかかる。ウソの自白をさせられた士官候補生は、更に尻を叩かれ、頬にも平手打ちを受けさせられた。

——っパチイインッパシインッ、ビシッビシッパシビシイッ！

「いたあつ——ひいいつ……ゆる、許ひつ——あうんっはひいつ！」

女体をつつ男たちの目も、狂気を帯びている。日々の抑圧された状況に対し、女を力で屈服させるという、歪んだ解放感に浸りきっていた。

「このつ、くそ売女があつ、淫売があつ！」

「ひいっ——ごめんなさつ——何でも……しますから——ゆるひてへっ——ひいいつ！」

もう何十発叩かれたのかも解らない。しかも淫液を染み込まされた女体は、叩かれる痛

みと惨めさまでをも、性感として貪欲に拾わされていた。

尻を、頬を、叩かれるだけで、目の前が白くフラッシュする。一方で、何もされていない秘唇は朱く上気して、腿まで蜜を溢れさせていた。

「見ろよっ、淫売は尻叩きだけで濡らしてやがるぜっ！」

「何でもするってんなら、オレたちにも身体を寄せよお！」

身体力が完全に抜けて、アミアリアはヒザ立ちへと姿勢を変えられる。

そのまま前後に男がヒザ立つと、膣孔と肛門、濡れた二孔をいきなり貫かれた。

「っんはああああっ——おしりっ……きつい——ゆる、ひてえ……」

太くて不潔な男性器による二孔強姦で突き上げられると、腰の中が完全に碎かれる。異常すぎる充足感で背筋が灼かれ、容量を超えた性感で脳が混乱させられた。

「はあっひんっ、はひいっ——こんな……すご、すぎるふうう……！」

前後への肉詰めによる、壮絶な快感。脳の中で、何かがバチバチと弾け続ける。肉体が震えて上体が揺れて、呼吸までもが鼓動に合わせて、短く速くされた。

息詰まる女に興奮した男たちは、優しさのカケラもない、怒りをぶつけるレイプで抽送を始める。

「身体は出世の道具なんだろっ、そうらっ！」

——つつプヂゅっちゅぷづぶつムきゅりゅちゅりゅつちゅつぷちゅっ！

前後の男たちがタイミングを合わせているのは、少女の為ではない。その方が自分たちが気持ちいいからだ。

そして前後から突き上げられる少女の肢体は、犯されるままに揺らされている。

「ひいっ、あはいいいっ——ゆる、してへええっ——おしりがっ、ひきゆふがあっ……おくまで、あつひいいいっ……！」

膣壁を突き上げられて腸壁を強姦されると、中と外から子宮が挟み打ちにされた。

腸壁を突く長いペニスには、背筋が悶える程の性感を休みなく与えられ、膣内を占領する太い勃起には、子宮口まで貫通されて脳髓までもが痺れさせられる。

心臓は限界以上の早鐘を打たされ、酸素を求めて唇が開き、涎と舌を垂れさせられた。

「おねがひいっ——はっあはあっ……ゆる、ひて、くらさひい……っあはあっ——なかれっ、ゴイゴイされるうっ——ふたりともっ、太ひいいい……っ！」

許しを乞う言葉と、胎内快感を告げる艶声が、唇から無意識に溢れる。同時に、強姦による性感漬けにされる脳裏では、母の姿を思い出させられていた。

人々の怒りをその身に受けて、詫びながら身体を売り続けた母。母は——。

「ごめん、なさひいっ——私は、こふてひの……おんな、れひたああああっ！」

母と同じ言葉を口走る。と、復讐を誓った少女の意識は、まるで弱々しい幼女のように、殻の中へと閉じ籠もってしまった。

虚空を見つめる瞳が、力なく揺れる。女体の制服を破いて、裸の胸を露出させた男たちは、豊かな双乳を揉み上げながら、射精へのスパートを掛けた。

「所詮は独裁者の牝犬かよつ、恥を知れえつ！」

——つつづつぷつぢゅぷりユぷチゅつ、むりゆきユむりゅつちぷちぶつりユむキゅつ！
 「つんはああああんつ——いいいいですうううつ……はんつんんつ……もつとおつ——もつと、ホカひてえええええつ！」

思い出の中で、母は男たちに媚び続けた。娘の為には、日々の糧を得る為には、心を殺して女体を発情させるしかなかったのだと、今の自分には理解ができる。

「いいいいつ男性の、勃起いいいいつ——はああつ、おくまでえつ——ああんつ、はくあああつ……わたしのつ、からだでつ——きもちよくなつてへええええつ！」

肉棒で犯される女体が、歡喜の頂点へと舞い上げられてゆく。

前後の女孔を突き上げられて、手足がジワリと感覚を失う。腸壁も膣壁も、男性の存在感に支配をされると、更に媚びて締めつけ、愛撫を捧げた。

強い抽送で上体が揺れて、栗色の髪が靡いて広がる。頭を揺らされると脳まで揺れて、更に快感が深くなった。

「イっちゃうううつ——ひいいつ……アミリアあ、あなたのつスゴイのでええつ——ひいあああつ——イっちゃひますふつ——わたしをつ、買ってへえええつ……！」

「お前の好きな、スペルマだあつ！」

「喰らえよつ、このメスっ！」

勢いの強い牡液が、腸内深くへと呑み込まされてゆく。

——ビゅっぶビゅー——ビゅー——ビゅー——ビゅー——つ、ドぶぶビゅるぶつどブュー——つ！

粘性の高い精液も、子宮内に射出される。

——つぶぢぶつぶりゅぶどりゅぶユぶびユどロぶユるルぶユつ、ドぶどろぶるユどぶ
ブゅビゅるるっ！

「んふひつ、むううんっ……中に、いっぱい……れふう……おかひあげ……ありがとう、
ごさび、まひ……たあん……」

絶頂を泳がされる女体が、上体をビクンつと跳ねさせた。お腹の中が熱の強姦粘液で満たされると、女の脳が汚れた幸福感で汚染されてゆく。

そして四人の少女戦士は、犯されながら一ヶ所に集められて、仰向けにされた。頭をくつつけるような形で十の字にされて、両腕は後頭部でくくられている。

乱暴な拘束で痛みが走り、極めてわずかに意識が戻った。言葉だけの、弱々しい抵抗。

「やら、よう……もふ、ボクう……」

「まだ、アタヒたち……を……！」

互いのヒジや、隣同士でヒザも結ばれて、起きあがる事さえできなくされる。そして周

りを囲む無数のペニスから、一斉に精液が放出された。

「このメス犬たちがっ！」

「四人まとめて、精液漬けにしてやるようっ！」

——っドブゆるっブびユぶるリゆるルるるっ、ぶビゅーーっ、ぶドびゅううっびゅっびゅぶくっぶルびゅっ、ブどぶびユびゅびゆるるぶドぷっ!!

まるで汚濁の花が散ったかのような、白濁液の雨が、四人の少女たちの肢体に振りかけられる。

マリトのツインテールが、幼いタレ目が、汚い牡液をたっぷりと浴びる。リデイのツリ目が蕩けて白濁液を受けて、改造された爆乳にも垂れ落ちる。

「あつひようっ……えっちなえきが、いっばい……あふん」

「チクヒョーっ……くさひの、かけ……こくん……おいひいよお……」

リウの美顔や黒い前髪が白い粘液で染められて、赤い唇にも呑み込まれてゆく。

アミリアはどこか遠くを見つめながら、肉体に男性の欲液を浴びる事を、生きられる喜びへと繋げられていた。

「ああ……だんせひ、の……」

「もっどほ……わたひを……かってへ、くらはいい……」

精液まみれの女たち。その姿は男たちに更なる欲望を湧き起こさせる。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>